

地球環境研究センター ニュース

CGER: Center for Global Environmental Research

<通巻第4号>

vol. 1 No. 4

- 目次■ ●「地球環境研究センター、平成3年度よりパワーアップ!!」…平成3年度予算内示
 ●特集：「1990.12.20,21 第1回地球環境研究者交流会議開催」
 ●M.&D.B. シーズ第4回「地球環境データベースの整備について(3)」
 ●M.&D.B. シーズ(特別版)「地球環境モニタリング計画骨子」

地球環境研究センター、平成3年度より
パワーアップ!!

— 平成3年度政府予算案 —

昨年末、平成3年度予算の内示があった。関係省庁全体の地球環境保全関係予算の内示額の概要は以下のとおりである。

(単位：百万円)

	2年度予算額	3年度内示額	増減額
関係省庁全体の地球環境保全関係予算	452,278	480,758	28,480 (6.3%増)
環境庁の地球環境保全関係予算	2,147	3,721	1,574 (73.3%増)
1 地球環境保全施策の一層の推進	1,827	3,317	1,490
(1) 地球温暖化防止行動計画の推進	0	194	194
(2) 地球環境に関する調査研究の推進	1,785	3,062	1,277
* 地球環境研究センター経費	285	986	701 (246.0%増)
① 地球環境研究交流推進等経費	23	17	-6
② データベース経費	34	41	7
③ スーパーコンピュータ経費	0	510	510
④ 地球環境モニタリング経費	228	418	190
・ 地球環境研究総合推進費	1,200	1,700	500
・ その他	300	376	76
(3) 地球環境保全のための国際的取組への対応	42	61	19
2 国際環境協力の推進	320	404	84

環境庁分は全体の「0.77%」程度であり、地球環境問題担当である環境庁としては、もっと頑張らなければならないことは言うまでもないが、平成3年度内示額は平成2年度予算額と比較して、70%以上の増額となっている。

また、地球環境研究センター経費は、285百万から986百万と大きく増額されており、当センターへの期待が高まっている。組織の充実を含め、さらに一層の努力でこれに応えねばならない。

1990年12月20, 21日

第1回 地球環境研究者交流会議開催

昨年12月20、21日の二日間にわたって、地球環境研究センター主催による「第1回地球環境研究者交流会議」が、国立環境研究所の大山記念ホールにおいて開催された。この会議は、地球環境研究に直接、あるいは間接的に携わっている研究者が一堂に会し、現在の地球環境研究の現状を理解し、今後の研究の方向を確認しあうことを主旨として開かれた。

20日の午後に行われた第1部では、地球環境研究の様々な分野において現在の日本を代表する研究者のなかから7人の方々においていただき、それぞれの分野における研究の現状、そして今後の研究の方向等について講演をいただいた。この日、会場につめかけた聴衆は300人以上を数え、大勢の立ち見が出るほどであった。その大観衆を前にして、環境庁の予算「地球環境研究総合推進費」の説明を含めた、今後の地球環境研究全体の方向性が語られた。また、途中の休憩時間には、地球環境研究センターの地球環境データベースの一端を紹介するコーナーを設け、またその内容は、昨年10月28日に開催された「地球環境研究センター開所記念講演会（東京：日本海運倶楽部）」の時とは違ったものを展示し、参加者の関心を集めた。

明けて21日。この日は朝9時から第2部のパネルディスカッションが行われた。このディスカッションにおけるパネリストの方々も、前日同様、日本を代表する研究者の方達であり、会場からの質問も取り入れながら活発な議論が交わされた。この

パネルディスカッションには、早朝より行われたにもかかわらず参加者の出足もよく、パネリストの方達による自由な意見の飛び交う非常に興味深い会議となった。

この第1回目の会議は、2日間にわたって開催されたが、今後どのような形で開かれるか、またいつ開かれるのかについては未定である。が、この会議は毎年開催されるものであり、主催者としても今回よりは次回、次回よりはその次といった具合に、その内容の充実を図るつもりでいる。そのためにも今回の会議にご参加いただいた、あるいは今後参加していただきたいと考えているの方々からのご意見、ご感想をいただき、今後の会議にできるだけ反映させていきたいと考えている。自由な意見、感想を「地球環境研究センター」まで。意見の送り先は裏表紙の編集・発行／連絡先宛に、できるだけ郵便にてお送り下されれば幸いである。



▲地球環境研究の各分野を代表する研究者が壇上に勢ぞろいした

Global Environment - TSUKUBA 1990 -

【当日のプログラム】

第1部 12月20日(木) PM13:00~18:00

<講演>

1. 「オゾン層」関連分野
名古屋大学太陽地球環境研究所教授 岩坂 泰信
2. 「地球温暖化現象解明」関連分野
国立環境研究所地球環境研究グループ 統括研究官 秋元 肇
3. 「地球温暖化影響・対策」関連分野
東京大学工学部教授 松尾 友矩
4. 「酸性雨」関連分野
東京農工大学農学部教授 戸塚 績
5. 「海洋汚染」関連分野
トキワ松学園女子短期大学長 平野 敏行
6. 「熱帯林」「野生生物」等関連分野
国立環境研究所地球環境研究グループ 上席研究官 安野 正之
7. 「総合化」等関連分野
国立環境研究所地球環境研究センター 総括研究管理官 西岡 秀三

第2部 21日(金) AM9:00~12:30

<パネルディスカッション>

(各分野パネリスト)

- ・「オゾン層」関連分野
東京大学理学部教授 富永 健
 - ・「地球温暖化現象解明」関連分野
東京大学理学部教授 松野 太郎
 - ・「地球温暖化影響・対策」関連分野
お茶の水女子大学理学部教授 内嶋 善兵衛
 - ・「酸性雨」関連分野
桜美林大学国際学部教授 大喜多 敏一
 - ・「海洋汚染」関連分野
トキワ松学園女子短期大学長 平野 敏行
 - ・「野生生物」関連分野
九州大学理学部教授 小野 勇一
 - ・「熱帯林」関連分野
大阪市立大学理学部教授 依田 恭二
 - ・「砂漠化」関連分野
東京都立大学理学部教授 門村 浩
 - ・「総合化」関連分野
東京大学先端科学技術センター 教授 竹内 啓
- (司会) 国立環境研究所地球環境研究センター 長 市川 悳信
-

地球環境データベースの整備について(3)
～地球環境オリジナルデータベース～

国立環境研究所
地球環境研究グループ 地域環境研究グループ
森田 恒幸 森口 祐一

地球環境データベースとして、既に世界規模で収集整備されているデータベースの情報源及びサンプルデータを加工・表示するシステムを前回までに紹介してきたが、今回は地球環境データベースの中心となる当センター及び国立環境研究所独自のデータを加工・管理するオリジナルデータベースについて紹介する。

当センターでは、オリジナルデータとして、

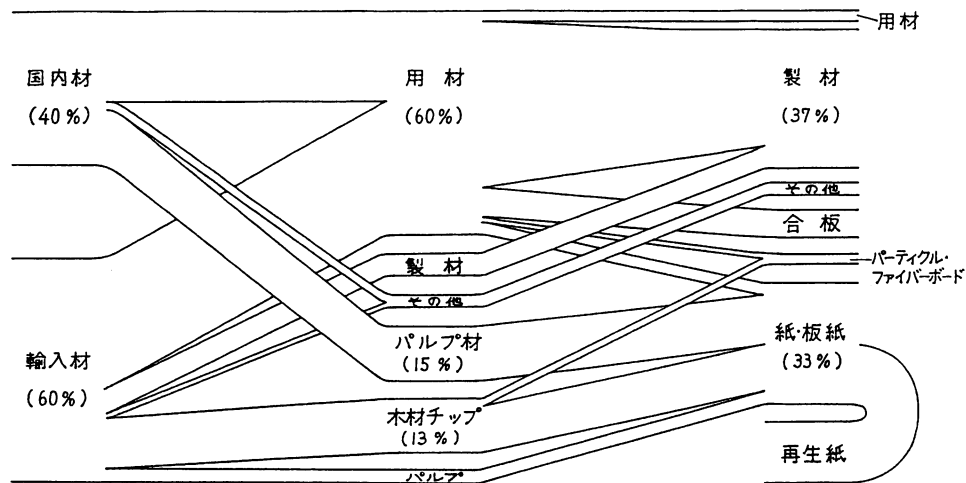
- ①当研究所独自の観測データ(地球環境モニタリングデータ等)
- ②当研究所が中心となり観測データを体系的に収集したデータ
- ③既存のデータを当研究所が独自に分析・加工したデータ

の3つに分類し、整備していく予定である。今回は③の分類に当たり、また総合化研究を支援する重要な基盤となる環境資源勘定体系を構築するための地球環境資源情報システムを紹介する。

環境資源勘定とは、水、大気、森林、土地、動植物、エネルギーなどの自然環境資源のストック(現存量、利用可能量など)及びフロー(人間による採取、消費、状態変化や自然の成長)を体系的に定量化しようとするものである。OECD環境委員会を中心とする「自然資源勘定」への取り組みが最近

の環境白書でも紹介されており、アルシュ・サミットでカナダから提案された「環境と経済の統合のための環境指標」算定の基礎としても利用が検討されている。こうしたデータが蓄積されることにより、人間活動による自然資源の量的・質的变化を総合的に把握することができ、さまざまな人間活動による資源の利用が地球環境変化全体にどのように影響しているかを知ることができる。たとえば、下図は日本における森林資源の利用構造を計算した結果である。

このような環境資源勘定算定のための基礎データを収集・分析・加工を行い管理し、算定結果を管理するシステムが地球環境資源情報システムであり、森林資源以外のさまざまな環境資源についても今後順次データ整備を行っていく予定である。



日本の森林資源の利用構造 (1985年)

M. & D. B. ソライズ(物販)

地球環境モニタリング計画骨子

我々の地球を蝕んでいる環境破壊の
結果、地球の温暖化、成層圏オゾン層
の破壊、酸性雨といった問題が顕在
化している。これらは各々の生活に
深刻な影響を及ぼしている。各々の
国々も、自国の産業の発展を遂げる
ために、自然環境への悪影響を考
え、自然環境の破壊を受け止めな
らなければならない。このため、今
日「地球環境破壊」といって、地球
環境の変動に対して有効な対策を講
ずるため、世界各国の地球環境研
究センターにおいて、地球環境モニ
タリングの推進を図る。これらデー
タは、地球環境研究データベースと
して国内外の研究者等の利用に供
される。

地球環境研究センターで行う地球環
境モニタリングの特徴を幾つかあげて
みる。

- ① 長期的・継続的な観測
少なくとも10年は継続し、その多
くは永久に続ける。
- ② 研究と行政の密接な連携の確保
モニタリングの結果は研究を通じ
て評価し、将来予測などに利用して
政策策定に反映させる。
- ③ 広範な研究者の結集(学際的・省際的)
大学や他省庁の研究者の参画を得
て推進する。
- ④ 国際的な視野と連携
国際的な協力体制を構築し、国際
機関との連携を重視する。
といったものがあげられる。
そして、その枠組みとしては、全体
として10年以上の時間スケールを基本
とし、5年毎に見直しをおこなう。範
囲は、アジア・西太平洋を中心とした
もの。予算規模としては初年度は2.3億
円、平成3年度は4.2億円となっている。

地球環境モニタリングは、プラット
フォーム別(5項目に分けられる。
〔オゾンレーザレーダによる成層
圏オゾンモニタリング
国立環境研究所にあるオゾンレ
ザレーダにより、成層圏オゾン
の高度分布を定期観測する。〕
〔人工衛星による成層圏オゾンのモ
ニタリング
環境庁がADEOS衛星に搭載するセン
サ(ILAS,RIS)により、極域を中心と
した成層圏オゾンの高度分布測定を
行う。〕
〔航空機による大気微量成分の空間
分布の測定
中型航空機に大気微量成分の測定
機を登載し、大気微量成分の空間分
布を長期的に測定し、南北半球の温
室効果気体等の分布とその季節変化
などを明らかにする。〕
〔地上ステーションにおける大気微
量成分の長期観測
地上観測所を設置し、温室効果気

体を中心に多くの大気微量成分を高
感度・高精度・高確度で長期継続的
に測定する。
(船舶による海洋汚染のモニタリング)
定期航路などを利用し、表層水に
含まれる葉緑素や栄養塩の濃度変化
を長期に測定し、東シナ海などの汚
染の進行をモニターする。

地球環境研究センターは、国立環境
研究所、大学、国立研究機関、地方自
治体の研究者、あるいは財団、民間企
業などの協力を得て、このような地球
規模環境モニタリングを推進していく。

地球環境研究センターにおいて既に
行われている、もしくは計画の検討を
はじめているものについての具体的
事業計画は、次号以降の「地球環境研
究センターニュース」で、追々紹介し
ていく予定だ。

地球環境研究センター活動報告

- 1990.12.20 地球環境研究総合推進費による「地球環境研究連絡会議」の開催
.20～21
「第1回地球環境研究者交流会議 Global Environment -TSUKUBA-」開催
場所：国立環境研究所 大山記念ホール
- .28 仕事納め
- 1991.1.4 仕事初め
.9～12
地球環境モニタリング地上観測基地設置計画に伴い、沖縄県を表敬訪問
(参加者) 国立環境研究所副所長(地球環境研究センター長) 他
- .10, 12
第2回 西表観測所分科会 沖縄にて開催
<分科会出席委員> 植田洋匡(九州大学応用力学研究所教授) 他
第2回 機器開発・精度管理分科会 沖縄にて開催
<分科会出席委員> 中澤高浩(東北大学超高層物理研究施設教授)
- .10～15
地球環境研究センター総括研究管理官 西岡秀三
「気候変動に関するディッチリ財団会議」出席のため、英国へ
- .22 環境庁長官 愛知和男、国立環境研究所視察
- .23, 24
第1回 サロベツ観測所分科会 北海道にて開催
<分科会出席委員> 太田幸雄(北海道大学工学部助教授)

編集後記

「地球環境研究センターニュース」第4号をお届けします。今月は、平成3年度予算の大蔵内示や、地球環境研究者交流会議の開催といったニュースが目白押しです。また、別紙でセンターニュース送付の希望調査を行っております。この申込をなさいませんとニュースが送付されない場合がありますのでご注意ください。

この「地球環境研究センターニュース」は原則的に月1回のペースで発刊していく予定であります。定期的な名簿の更新以外にも、随時送付希望を受け付けておりますので、下記までお問い合わせ下さい。

編集・発行 環境庁 国立環境研究所
地球環境研究センター
連絡先 観測係(大橋)

〒305 茨城県つくば市小野川16-2
TEL. 0298-51-6111 EXT. 374
FAX. 0298-58-2645

このニュースは、再生紙を利用しています。